

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、語、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和8年7月10日(金)

みんなの居場所

【愛語録】

「させられる学び」から「自ら学ぶ」に変わるとき、苦痛は喜びに変わり、生甲斐が生まれる

私の夏休み〜中学校編〜

小学校編に引き続いて中学校編です。じつはお付き合いが長いので、中一の頃は小学校時代の延長のような、何となく過ごした夏休みでした。友達と遊びにしても中学校でできた友達と遊びたいというよりは、小学校時代からの仲間たちと遊びたいという気持ちがします。

本格的に夏休みを楽しむようになったのは、中二からでした。当時、よく覚えていたのは、音楽でラジオの深夜放送が流行っていたことです。音楽はどのようにして楽しんでいたかというと、「コンポーネントステレオ」が家にあったので、テープレコーダーをカセットテープに録音してもらったのです。それを持ち帰り、壊れるまでのラジオをいれて聞けるのです。テープの巻き込みを防ぐために、弛めきってヘッドと再生ボタンを押していたことを思い出します。ラジオの深夜番組は「オールナイトニッポン」といって、聴者の皆さんも分かるのではないのでしょうか。夏休みには夜更かしをしてよく聞いていました。当然次の日は起きるのですが、夏休みは寝る時間が多かったのです。

中学校時代の夏休みは、ちょっと背伸びをするようなイメージがあります。聴者の皆さんは如何でしょうか。例えば「友達の家で勉強をする」といって、これは純粋に勉強をするというのではないのでしょうか。明日は明日。いわゆるそれを理由にして友達の家に行ったの、あやふさはなかったの、という認識です。私の場合、中二までは、友達の家泊まりに行くといいましたが、友人と友達の家泊まりは遊びに行っていました。

また、自転車仲間と一緒に遊びに行っていたのを覚えていて、中三の時は受験勉強が強化されたから友達と一緒に大卒の姉の町に行くといいました。早朝5時スタート、目的地は釣りの場まで、釣った魚を持ち帰り、夕方7時頃に自宅に到着しました。往復140kmほどあったのではないのでしょうか。本格的なサイクリングのような距離ですが、乗っていた自転車は重たい旧型のもので、よく覚えて走ったものだと思います。

更に、当時の担任の先生に協力して頂き、キャンプに行きました。球磨川沿いの大坂間というところにある「球磨洞キャンプ場」に行きました。お決まりの肝試しでは女の子がベアになって行動するのですが、女の子は怖がってキャーキャー言いながら、私に抱まっていた。私は照れに照れまわって、怖いけれど嬉しいという複雑な心境で、その時の表情は、怖がる部分とにやめる部分とが混合された、今でも不器用な表情になっていたように思います。

中学校という、大人になる前の危うい時期ですね。少しずつですが背伸びをして、大人に憧れ、理想の大人を目指し、不器用に努力を続ける、そんな夏休み(時代)だったような気がします。

シリーズ「自分を語る」#1112

「澤田先生、ご苦労様でした。」来年度(平成29年度)の相談です。「今度は何？」と顔が引きつるのを感じた澤田でした。(質問は「おまけ」で)「澤田先生、今年は先生のお陰で私も澤田先生に職員も楽に時間を過ごせた。」「俺も楽しかった。ありがたうございませう。」

「ん、相談なんだけど、来年もその楽に時間を過ごすべからうか。」

「6年担任というのですか。」

「そうですね。6年が安定すれば学校全体が安定するからね。あつ、喜んでお受けします。」(内心本当に喜んでいました。)

「ついにお願いしたいだけや。」

「体育主任ですかね。引き継ぎお世話になります。」

「いやいや、そこはいいです。別のポジションをお願いできるといいですね。」

「来年度、市教委指定の研究発表があるのは知っていますね。で、研究主任をお願いしたいんです。」

「この時点で、校長先生の心の中では構想は出来上がっているはず。じゃあ、いなくても仕方のありません。校長先生は私のキャリアアップについては考えてくださっています。という訳で、学級担任は、ポイントで飛び入り、校務についてポイントでの起用となり、刺激的な一年を過ごしたいになりました。」

学級担任発表の日、子ども達の微妙な表情…。今でも忘れません。厳し先生というイメージが強く、確かにそうなのですが、子ども達には別のイメージが刷り込まれていました。それは「ナイトハイク」です。「澤田先生のクラスになるとおかしなことになる。」毎朝運動場を一周走らせられる。「と、運動が苦手な子達にとっては、絶望的な毎日イメージされていたのです。そんなに厳しいはかりではないんですかね。私は子ども達の自主的活動や自己決定を尊重してきていたのです。その年の子ども達にも同じように投げかけました。」

「ナイトハイク、キャンプ、朝のランニング、やるかやらないかは自分達で決めていいぞ。ただ、楽い方には流れなよ。後悔あるとが目に映っているからね。迷った時には困難な道を選んだ方がいい。」

何のことはないませんでした。子ども達の集団決定は「ナイトハイクもキャンプも朝のランニングも全部やる。」でした。私はほくそ笑みながら一言いしました。

「じゃ、がねーな、なら、せにゃんたい。」

予想通りの子ども達の動きに満足しながら、学級は今年も安定傾向になど感じた4月5日でした。問題は校務の方でした。私は研究主任の経験が殆どなく、ましてや市教委指定の研究発表なんて何をどうしたら良いやら、右も左も分かりません。兎に角、校長先生に相談しながら、指導を受けつつ進めるしかないと思えました。当時の学級指導要領は「言語活動(学習内容のアウトプット)」が目玉であり、今でも通ずることは子ども達の主体性や活発な活動活動だったと思います。(ついで)